

ヤンゴン素描 11

カンベ駅とその周辺

山形洋一

本連載ではこれまで、もっぱらヤンゴン市の西と南を紹介してきたが、今回は鉄道の東側、ヤンキン町とサウス・オカラパ町の境に位置するカンベ駅を紹介しよう。中央駅から数えて5つ目の駅である。



図 1 カンベ駅。古い木造の駅。東の路線では最も乗客の出入りが激しい。

西のチーミンダインのレンガ造りに対して、東のカンベは木造でつつましく、古風で愛らしい。その切妻の改札口をくぐると「カンベ駅通り」に出る。両側に店が並び、サイカーのベルの音がにぎやかだ。ここでも逞しい女性がたち働いているが、インド系の小売店が多いことが特徴だ。

通りは 1929 年の地図と変わらず、左へゆるやかな弧を描いてモー・カウン寺に達する。外国人観光客と無縁の寺だが、土産物屋と占い師の店が多く、地元では信仰を集めているようだ。カンベの町はその門前町として栄えたのだろう。古くは家畜市場があったという。

古い地図ではこの寺からさらに東へ坂を下ったところにモスクがあったが、今ではタミル系のヒンドゥー寺がそびえている。インド人の多い地区の常として、ゴミの回収業が盛んだ。



図 2 カンベ駅前商店街。インド系の店が目立つ。

寺の前をまっすぐ西へ通る「カンベ道路」は、バスや自動車の交通がはげしく、大衆向けの飲食店がならんでいるが、すぐにインヤ湖の東の堤防にぶつかる。湖ができる前は峠越えで、レーダンやカマユツまで続いていたのかもしれない。

この道の東は「ティッサー道路」と改名して 2 キロ半続きンガモーイエッ・クリークの手前でオカラパ・ミョーウー仏塔（ゼディ）に至る。ミョーウーとは「元町」という意味だろう。その南およそ 2 キロの地点にあるチャイツ・カサン寺は、モン族の建てた由緒ある寺だ。

オカラパ・ミョーウー寺の裏は船着き場で、まるで歌舞伎の「俊寛」の舞台に出てきそうな船が対岸と行き来をしている。片道 100 チャット。のどかな風景だ。



図 3 オカラパ・ミョーウー・ゼディ（仏塔）裏の渡し場。

カンベ駅は 1929 年の地図では Kanbe North と記され、当時の町の中心から北にずれたところに作られたことがわかる。その目的は、近くで操業していたレンガ工場の製品を積み込むためだったと思われる。

カンベの最初のレンガ工場はもっと南にあったが、今では工業省の第一庁舎が建っている。そして「カンベ北」のレンガ工場跡地には第二庁舎のほか、農業灌漑省、森林省、測量局、師範学校なども誘致されている。インヤ湖せき止めによって露出した泥を用いてレンガを焼き、そのあと干拓して「新開地」としたようだ。

ところで「カンベ」の「カン」は、従来「湖・池」を意味する文字で綴られていたが、最近の駅名表示では、「運」を意味する綴りとなっている。おそらく両方とも当て字で、本来は先住民モン族の地名なのだと思うが、その語源についてはまだ納得のゆく説明を得ていない。どなたかご教示いただけないだろうか。